

東大見学会のガイダンスに自由時間を奪われ、ああもう参加しなければ良かったなどという考えは、今考えれば恥ずかしいものであった。アポイントメントを取る段階で私はかなり疲弊していた。そして、このアポイントメントで、私は社会の不条理さを知る。第一見学志望大学に電話をかけ、後程メールを送ると言われた、そこまでは良かった。しかし、一向に返事は来ない。班員も、返事が来ないからと言って、他の大学にアポイントメントを取るなど、二股のようで良くないと、ひたすら返事を待った。期日が迫る。仕方なく、第二希望の、今回行くことになる東京大学隈研究室に変更した。たかが学生の申し出と軽くあしらわれたのだろうか？現実の厳しさを目の当たりにした。

隈研究室の隈教授にお話を伺いたいと、アポイントメントを取り直した。だが、ちょうどオープンキャンパスの頃であるし、忙しいだろう、困難に思えた。受け答えをしてくれた秘書の方も突然の申し出に戸惑っているようだった。「教授でなくても、学生の方でも良いです。お願いします！」そう言うと、了承してくれた。後日担当者が決まったというメールが送られてきて、行く前からやりきった感が出た。思えば、アポイントメントというのは、自主的にはできないことだ。将来職に就いたら、きっとアポイントメントを取る機会があるだろう。この経験は、確実に将来のためになると思えた。

いよいよ東大見学出発の日である。私の班は新幹線内で訪問先で聞く予定の質問をまとめたが、もしかしたらそんなことはしなくても良かったかもしれないと、実際訪問してから思った。車内で、新しく、"二高生らしい"質問を考えるが、全く良いものはひねり出せない。聞きたい事というのは考えて出すものでなく、ふと普段の生活で浮かぶものなのかもしれない。そんなことを考えているうちに、私は眠ってしまった。目覚めた頃には埼玉県であった。おそらく理系に進むであろう、建築家志望の二人の後輩は埼玉のビルディングを見て早くも興奮状態だ。これからこんなに活気ある二人と建築学科を訪問すると思うと、何か不安になった。私はそもそもガチガチの文系であって、デザイナーとか、建築とは少しずれたところを(なんとなく)志望している。なぜ文系なのかというと、言ってしまうと、数学が大嫌いで、国語が大好きだからという、至極単純な理由からである。それに、デザイナー自体、文系の分野に入ることもある。いくら二人より長く生きているからといって、建築は理系分野のことだし、と今まで興味のなかった私は、訪問先で二人の勢いに飲まれて押し黙ってしまいそうだった。

東京に着く。都会は蒸し暑かったが、まだ見ぬ新世界によるわくわくが湧き起こり、嫌な気分はしなかった。午前の企業訪問のはじまりである。意外と駅から目的地の三菱商事本社ビルは近い。流石一流企業はこんな駅前の都心に本社を構えるものだなあと感心した。そして、高校生の分際で、ここに入って良いのかとドキドキした。ビル内はとてもスッキリしていて、無駄がない。一体どんな会場なんだ、これから入るのは？どんな話し合いをするのだろうか？まさか、生徒は会場に放り込まれて、イゲンアル社員の方々といきなり話しでもするのか？会話が苦手な私でも乗りきれぬか？こんないらない心配をしていたので、きっと挙動不審だっただろう。

(ただ、ミーティング形態くらいはもっと事前に教えて欲しいと思った。)

実際のミーティングは思ったより気軽に行われた。すんなりとその場に溶け込むことができたと思っている。シャケの話では、生徒のノリが良いのか悪いのか、返答が面白くて、良かった。身近な食材であるシャケ。企業の側からなんて考えもしなかった。身近ということは、それだけ需要があるということである。そんな視点が私にはまだまだ足りないのだと自覚した。成功のタネはそこらじゅうにゴロゴロと転がっているのではないか、それを見つけ出してないだけだ。シャケに可能性を見だし、販売だけでなく、研究もしているという紹介は、とてもタメになった。三菱商事でまた、ここは見習うべきだと感じた事がある。ズバリ、「ひとつのことに固執しすぎない」ということだ。社員の言った通りの言い方をすれば、「市場だけではなく、原材料の供給地や輸送機関など関連するもの全てに着手する」といったようなことだろう。視界の狭い、一途な仕事しかやらないのなら、そこから横への広がり生まれぬ。時には他の企業ともタッグを組む、そんな外との繋がりがなければ、総合商社は成り立たない。なるほど、私はどちらかという、ひとつの事に熱心になりすぎているような気がする。

バランスは、何事においても大切だなあと思う。先ほども言ったように、国語が好きだからといって、国語ばかりやっても大学は受からない。この事は日常生活全般一勉強、趣味など全てに通ずるものであった。そして、グローバル化が進む世の中では欠かせない、海外のお話。外国の出張先で、夜中に電話がかかってきたり、どうしようもない事で助けを求められたり…「仕事」とは一筋縄ではいけないものであると痛感した。このお話で最も重要だと思った教えは、「相手がなぜそんな行動を取るのか考えよう」だろう。人はよく、「人の嫌がる事はするな。」「相手の気持ちになれ。」と言う。感情は人それぞれだ。例えば、私はホラーアニメを見るのを嫌がらないが、人によっては、嫌がるだろう。でも、誰がどんな好みで、なんて事はがつつりと話さしあってきた友人くらいしか分からない。いや、友人の事さえ全ては分からない。それが当然である。だから「相手の気持ちを考える。」は難しい。しかしながら、相手が嫌がっているという「現象」は見ればわかる。ホラーアニメを見ようとして、相手が嫌がったら、相手はそれが苦手であると察することができる。じゃあ、ホラーはやめよう。と、こう機転をきかせれば、仲違いなく万事解決である。つまり、相手の行動から、相手の気分を知ることが、「気持ち」を考えるより遥かに簡単で、不祥事も起こしにくいということだ。すぐに思い付きそうだが、思い付かなかったこの教えは、会話が苦手、人付き合いが不得手な自分にとって素晴らしいものとなった。

次に、社員一人と生徒数名との交流が始まった。社員の方とじっくり話してみると、その人個人の人生や信念が見えてきた。まず、人生はなんとかなるということ。というよりは、一本道の人生などないと言うべきだろうか。ずっと夢を追い求めて、三菱商事に入社したのではないそうだ。私と同じ年頃の時、夢は漠然としていたという。私も今、どこに勤めようという明確な夢は決まっていなくて、それでは将来駄目になってしまうのではないかと、時たま不安になるが、この先、大学に入ってさらに新しい出会いがあるだろうし、急ぐ必要はないのだと、私は少し安心した。また、「スマイル」の大切さも教わった。世界の人々とだけでなく、日本のなかでも、話すときにきつと考え方の食い違いによって、衝突が起こるだろう。しかし、「スマイル」、つまり笑顔を見て、誰が不快な気分になるだろうか？ 笑顔をするとき、笑顔になった本人の気持ちも明るくなり、それを見た周りの雰囲気も和む。私は中学生の頃、合唱部に所属していて、先輩や顧問の先生に、笑顔で歌うようにとよく言われた。笑顔になると、歌声が明るくなるものだ。笑顔による声の質の変化は発声によるものでは実現が難しかった。この声の良い変革も、場を和ませる一因なのだろうと思った。

三菱商事の社員の方とのお話が終わり、ついに自らアポイントメントを取った東京大学隈研究室に向かうこととなった。面会予定時刻より随分早く着いてしまい、押し掛けるのも良くないと、扉の前で待っていた。待っている間、今回お話を伺う平野博士のことについて考えていた。事前に調べたホームページで、平野博士はとても厳格な方と思っていた。ページのレイアウトや、写真、設計した作品の説明を見た時点で、とても緊張していた。扉を開けていよいよ中に入る。予想とは裏腹に、研究室は物が溢れていて、本がドサッと、無造作に置かれていて落ちそうになっていた。その雰囲気ははりつめたものではなく、緩やかであった。平野博士は見学プランを練っていたというより、私達が体験して面白く感じそうなところを案内してくれた。CGでの設計が、建築学に明るくない私にとって、新鮮だった。方眼紙にシャープペンで設計図を描いていくというやり方は古いのだろうか、やらないらしい。全てコンピューターが処理し、設計した物体の展開図まで作ってくれる。さらに、コンピューター上で物体を造る作業は意外と単純で、電気回路を組み立てる時のように、「ここは線を、直径何センチの円にする」「ここは線を歪ませる」などの指示ができるスイッチを回路に設置していくのである。これによって、造られた建築物はMMD(主にキャラクターのCGモデルを、同じくCGのステージで自由に踊らせるツール)に似ていると思い、共通点を思いきって質問した。せっかく来たのだから良いだろう。そして、答えが返ってきて私は驚いた。なんとMMDは知らないという。CGに関するものは網羅していると思っていたが、そうでもないのである。建築は一人ではできない。設計の専門家、材質の専門家、空調の専門家などが協力して造り上げるらしい。だから、一人が全てを網羅しているのはないのだろう。一通り、工学部一号館を見て回った。一号館だけに、歴史は古い。昔は外壁だったところが、増築して廊下の壁になっていた場所もあり、興味深かった。案内されるうちに、新幹線で考えていた質問は、大体解消してしまった。代わりに、その場で聞きたい事がどんど

ん出てきた。ここでも、「視野を広げる大切さ」を学んだ。しかも、今生きている人々の視点を飛び越えて、過去や未来の人々の視点から捉えるという、思ってもみない事だった。現代では、京都や奈良のような古都は景色がもてはやされ、趣深いと言われるが、東京のビル群は風情があるなどとはあまり言われない。しかしながら、昔の人々は整然と並んだ京都の町並みを、本当に風情あるものとして見たのだろうか？もしかしたら、現代人が東京のビル群に対して思っている事と同じように感じていたのではないか？もっと言えば、「つまらない」と感じていた可能性もあるのだ。また、未来人からしたら、平成の、直方体の建物が並ぶ風景を面白く感じるかもしれない。時間の流れで見方は変わる。この、価値観の時間を越えた変わりかたは、まさに新しい風であった。ホテルに着き、夜の懇談会では、具体的な勉強法についても教わった。チャートの問題は難しいが、一度分からなくても大丈夫、二度目で間違えたらそこは“苦手”であり、潰さなければならない。また、別の生徒の質問で、なぜ東大に入ったのかというものがあつた。その時の答えは「まさか自分も東大に入るとは思っていなかった。高一の頃は夢も漠然としていた」だ。三菱商事の方のお話を思い出す。人生というものは、実に些細なことで大きく変わるものなのだ、と改めて感じた。そのチャンスをできるだけ逃さないために、色々な物事に着手し、可能性を、自分から広げていくことが大事であると分かった。その夜、後輩でマジックが上手い人がいるので、見物しに行った。見抜けないマジックを楽しんで、翌日に備えて寝た。

二日目。東京大学研修だ。行きは一日目と同じなので、スムーズにいった。友人との見学は、変に気を使わせないで自由に行動できて良かった。改めて赤門や安田講堂などの東大を象徴する建築物に圧倒される。テレビで見るよりも、何倍も迫力があり、まるでここの学生になったかのような感覚に陥った。そして東大内のスターボックスに入った。人生初のスタバが東大とは、とても贅沢だ。私達は予約していたツアーの時間になるまで、東洋の研究をしている施設の図書室に入り、気ままに本を読んだ。本当は東大の大きな図書館の本館に入りたかったのだが、丁度新館を建設中で立ち入り禁止になっていた。ツアーが始まった。赤門にはハートマークの穴があり、恋愛に関して縁起が良いと言われるが、東大生に限ってそれはない。など、どことなくブラックなユーモアを含んだ紹介であつた。野球で連敗していること、だが勉強ならば負けない！と学生が目線からのツアーは楽しかった。さらにお土産も買った。友人オススメの東大開発「体力式ゼリー」。美味しいので普通に飲みやすい。ショップでは東大開発「抗菌ボールペン」、東大開発「微生物入りのクッキー」など、とにかく東大が作ったという点がアピールされていた。自分が考えたものがカタチになり、それを買ってくれる人がいる…どれだけ嬉しい事であろうか。誇りが感ぜられた。

少し時間が余つたので、東大が展示物を貸し出している博物館にも行った。剥製がずらっとならんでいて、昔これらが生きていたと思うと、少し悲しくなつた。民族楽器や、数学的な図形、エジプトのミイラの棺など、多種多様な展示物があつた。革靴で足が痛くてまともに見られなかったのが残念でならなかつた。東大に戻り、カフェテリアで休憩していたところ、横に“英語で中国語を勉強しあう東大生と留学生“がいた。格の違いを見せつけられるとともに、努力すれば、自分もこんな風になれるのだろうかとも思えた。

その外観にも、内側にも終始圧倒させた東京大学。もっと思い切り楽しむべきだったという後悔もあり、充実した二日間だったという満足感もある。時間が経ってもよく覚えているということは、それだけ強く印象に残つたということだろう。何にせよ、貴重なこの体験は、必ず将来の支えとなるだろう。